

古屋祥子氏追悼

赤城山麓の大きな農家

松尾祥子

父の転勤で前橋に引越した我が家を、古屋祥子さんが訪ねて下さったのは、昭和四十一年の春のことでした。古屋さんと母は、「多磨」から「コスモス」創刊に参加した仲間でしたが、お互い結婚や出産、子育てなどの忙しい時期だったこともあり、直接会うのはこの時が初めてでした。

「今度、松尾佳津予という者がそちらに行くから、宜しく頼む」と記された柙二先生の手紙をたよりに、ご自分で栽培しているフリージアの花束と、飼っている鶏の産みだて卵を持って、長女のしおぶちゃんと一緒に家まで来て下さったの

です。しのぶちゃんも私も小学一年生で、背丈も同じくらいで、すぐに仲良くなりしました。私と同じ名前の古屋さんをとても親しく感じ、「祥子ちゃんのおばちゃま」と呼んで、古屋さんのお宅にも、家族皆で遊びに行きました。

古屋さんのお宅は、赤城山麓の大きな農家で、母屋の横には花を栽培する温室があり、フリージアをはじめ四季折々の花を育てていました。奥には鶏小屋や豚小屋、山羊の小屋もありました。「豚はきれいなよ」などと話を聞きながら、「なんて広いんだろう！」と驚いたことを今でも忘れません。山羊の乳を搾り、山羊や豚の出産に立ち会い、豚の出産に際しては十頭もの仔豚を取り上げるという話に、この細くて美しいおばちゃんまのどこにそんな力があるんだろうと、子供心にも信じられない気持ちでした。現住所は前橋市富士見町ですが、当時

は、勢多郡富士見村（合併で消失）でした。古屋さんは婿養子を取り、九十年以上、姓も住所も変わることもなく、父祖伝来の土地を守り続けて来られました。赤城嵐に負けず、巡る季節を肌で感じながら歌を詠み続けて来られました。目を閉じると、さっそうとバイクに乗って、赤城山麓を走る姿が浮かんできます。ご冥福を心からお祈りいたします。

感謝の気持を込めて

宮崎小夜子

突然の訃報であった。哀しみが押し寄せ、涙がどっと溢れ、私のなかの一本の太い柱が倒れてしまった、そんな気がした。何事にも身が入らないというのは、こういうことなのかも知れない。

葬儀の日、お柩に眠る古屋さんに、対面させていただいた。白装束ではなく、うすもも色のセーターとカーディガン姿で、安らかに眠っていらっしやった。支部歌会でご指導して下さいった時のお姿、そのまま旅立って行かれた。

古屋さんと始めてお会いしたのは、富士見村（現在、前橋市富士見町）の図書館であった。四十数年前のことである。私は長子の手を引き、下の娘を背負っていた。緊張して何も言えない私にやさしく、温もりのある笑顔で「私は農家の主



こや・しょうこ

昭和5年、群馬県生まれ。昭和28年「コスモス」入会。昭和62年O先生賞、同63年コスモス賞を受賞。歌集『花の表情』『虹の弧』『軽舟』『花信風』『地上根』。令和4年12月20日逝去。

婦よ、稲作やお花づくりをしているの、今日もバイクをとばして来たのよ」とおっしゃり、私の気持を和らげて下さった。素晴らしい人との出逢いに、進歩は遅くても少しずつ短歌を学ばせていただくこうと思った。

そんなある日、古屋さんのお誘いで、足利学校、そして鏝阿寺ぼんあじを見学することになった。足利学校の歴史や、孔子の教えに基づく儒学を中心とする学び舎であること等々、細やかに語って下さった。この日の古屋さんの豊富な知識と、前向きな考え方に、年齢を超えた若々しさを思い、どれほど励まされたことか。

まもなくして「コスモス」へ入会したのだが、若くして有能な人、歌のうまい人の中で右往左往するしかない私を「前橋で数人の人と短歌の勉強会をしているの、ぜひ参加して」と誘って戴き古屋さんの懐へ。自分なりの総括、視点、心情を伝える大切さを学び、明るく、きびしい指導が魅力であった。引込み思案の私に「内省的な人は短歌に向いている」とO先生賞への応募も勧めて下さった。もの心ついてから、やさしい人に囲まれてきた私。多くの人がさまざまな生き

方をしている。真実の哀しみをみつめている時、魂で会話できることを知った。生きる姿勢を最後まで崩さなかった古屋さんに感謝する昨今である。

古屋さんと花語りせむ

小松朝子

古屋さんに初めてお会いしたのは、私が入会した翌々年の、昭和五十二年五月に赤城山麓で行われた両毛歌会の時でした。

ピンクのブラウスを召されて、綺麗なお声でお話をされていたことをはっきりと覚えています。その後しばらくして歌会に出席させて頂いた時、先輩から、

「古屋さんはね、歌人でもあり学者さんでもあるのよ。短歌を生活の一番上に置いておられるのよ」

と教えられて、スゴイ人だなあととても感心し、敬服したのを昨日のように思い出します。その頃でしょうか、母上様と一町歩の田を耕作し、養蚕をされ、花を栽培されていたことを後で知ったのです

が「…われは一度も指輪をはめず」という歌にとても感動しました。古屋さんというところの歌が何故か思ひ出されます。

『地上根』の「微塵みぢちんとはいへど存在確かなり、われは宇宙に、過去現在に」の歌も私は大好きです。

その後しばらくして私が個人的にご指導をいただいていた時『地球大紀行』の歌ばかり詠んでいると、

「もつと身近なことを詠むように」

とのご注意を受けて、その後は家族や内職のことなどを詠むようになりました。

平成十九年に私が初めて歌集を出せる

純真なる魂の生みしもの

古屋祥子の生前出された五冊の歌集を讀み終えて、古屋祥子という歌人は、七十年以上もの間、宮柁二と「コスモス」を愛し続けたのだと得心した。宮柁二を信じ、「コスモス」誌に拠り、ひたすら詠み続けてきた、その純真な魂の有り様

ようになった時、拙い二千首の中から四九八首を選んで頂き大変お世話になりました。

その時に次の三点のいずれかを決めて歌集を編むようにといわれました。

◇自分の過ぎ行きの記録か？

◇家族へのメッセージか？

◇他人（結社の友人や知人など）に自分の生を知らせるためか？

古屋さんには半世紀近くもの間、仲良くおつきあい頂き感謝の気持で一杯です。

もしも彼岸でお会いできたなら、歌語り、花語りをしたいと夢見ています。

鈴木竹志

に感銘を受けざるを得なかった。その直向きな歌の精髓は、第一歌集『花の表情』に余すところなく提示されている。古屋は、家業を継ぐはずであった弟の突然の逝去により、長女としてやむなく事務職を辞して、家業の農業を継いだ。

母と共に日々農家の仕事に明け暮れたのだが、歌集を讀んでただただ驚いた。単に稲作だけではなく、養蚕、花卉栽培、規模は小さいが酪農や養豚、養鶏にまで手を広げていたのである。養蚕は母親が主であったが、他は古屋が中心となっていた。その農業に関わる歌を紹介する。

田と畑と荒れたる屋敷受け継げばが先なかば決まれるごとし

婚礼の日まで手指を荒らすと言はれをり豚の餌を溶きつつ

搾乳を嫌がる山羊をなだめつつオリブつけて乳房揉みをり

黒き小さき瞳が一斉にこちら向き百五十羽の雛が餌を欲る

一万球八丈島より購ひて植ゑしフリージャヤ突る芽を上ぐ

移植・施肥・日照・灌水少しづつ異なるは花の表情違ふ

最後の歌は、歌集の題となった「花の表情」一連四首のうちの一首である。いずれの歌も、農に携わる生活を活写した優れた歌となっている。「コスモス」の正統を継ぐ歌と言えよう。

第二歌集『虹の弧』は、歌の素材に大きな変化がある。農業に関わる歌は減り、

景観や美術品を素材とした歌が多い。そのため、前歌集の歌とは異なり、全体に躍動感に欠け、静穏な印象を与える歌が目立つ。古屋はあえて歌の素材を変える道を選んだのである。二首挙げる。

節高き手を自負とせり農婦なるわれひとたびも指輪を嵌めず

「日本人われ」とうたひて梅園に隠れ給ひし師を探しゆく

二首目の「師」はもちろん宮柵二である。第四歌集『花信風』には、宮柵二の教えをひたすら守り、歌を詠んできた念いを吐露した歌がある。この二首である。

「嘆き歌捨てて歎びに真向かへよ」師の言葉守らむ生くる限りは

宮柵二に選ばるる歌月三首そののみを信じきそれを頼みき

第三歌集以降、歌の多くは自己省察の歌である。高齢になっても、常に思索する態度を失わずに、作歌に勤しんでこられたのは、やはり私たちは範とすべきであろう。自身の今を見つめ、自身の過去を振り返り、またこの世の中の変貌に対しても、目を背けず直視する態度は、やはり学ぶべきものが多々あるのである。わがひと世農に終るをよしとせむ母も

農婦の生遂げたりき

『軽舟』

つくづくと平和良きかな野をゆきて一期一会の花との出会ひ

『地上根』

流されて終つてしまひさうな生、詠みてとどめん「生のあかし」を

少女より農婦、老婆となるまでをわが生に受けし恩愛思ふ

古屋祥子作品抄（十八首）

田草取るわれに昼餉を告げに来て坂の上より子らは手を振る

『花の表情』

照り翳る思ひの中の照る部分のみを言ひつつ翳るわたくし

『虹の弧』

見覚えの服着せられて立つ案山子あるじよりなほ哀しき顔に

きつね雨過ぎし明るさ対岸に立つ虹の弧はまだととのはず

生れぐに上つ毛のくに風のくに風と暮らして風を手懐なつく

天よ地よ雲よ小鳥よさやうなら葉を震はせて樹は倒れゆく

『軽舟』

切株に来ては遊べるじょうびたき尾を振

れば腰の白き斑うごく

睡眠専用車なるローカル線乗り来るひとは直ちにねむる

死のちも判つてもらはなくてはよいひとり心は孤独と違ふ

たんぼの絮毛飛び立ちゆく日和 来いよ来いとひとよどりが鳴く

『花信風』

何処からも便りなき今日春耕の田より堆肥の匂ひ届けり

勤勉を当然として経し世代シルバードラントニアみんな生真面目

充分に意は尽くせぬど歌を評し「良い」といふとき心明るむ

要らぬことを見過ぎ聞きすぎ毎日の時間を無駄にしてはをらぬか

『地上根』

田いち枚また一枚とめぐりては楽しかるべし水のみちくさ

山もみぢ日にけに色をふかめ来る 赤城の嶺が近づくやうに

彼岸より来たれる人か古地凶手に首かしげつつ川に見入るは

「鼻高山見晴らしの丘」畝ごとにつづくコスモスにあをぞら迫る

「コスモス」令和5年1月号

（抄出||小島ゆかり）